WSON 42 .4 .744
Aug. 1894 no. 393

女學雜誌

明治十八年初刊

每週土曜日發兌

第三百九十三號

要目

戰時雜感
此の大時節に際會して警思する所ろ多し。戰爭の福音に聽き、生死の疑問に問ひ、一國の天職を思ふ。即ち是れ編者尤とも謹嚴の筆。

畫道の眞心
無光子初めて文壇に登り、多年の抱負を一朝に吐發す。今や畫道廢れ、丹青を語るもの赤誠うすし。此人の如き即はち斯道を中絕に與すもの。

美なる實行の活例
こは實際の美談なり。眼頭つねに聖賢あり、たゞ之を敬視せざる耳。此人の如き、即はち万人の教範とすべし。讀みて感激せざるもの誰ぞ。

つまさだめ
露葉子、孤高靜修の筆を染めて、稀に吟ずるの詩胸をうつす。前後二談、紙六頁。情緒綿々、餘韻盡くるを知らず。何んぞ凄靈なる。

是れ國民大警醒の時機
山月子、悲慨謹厚の筆を以て鬱勃の思をやる。文短、意切。まことに預言者の調。目下まことに讀まざる可らず、又警醒せざる可らず。

明治二十七年八月十八日發兌

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十三號目録

社説

戰時雜感(上)

謹んで戰爭の福音を聽くべし
大日本の愛國夫れかくの如し
此國は至大の國なり
此大國民今や支那と戰ふ
左れど戰かひは驕るべからず
諸君しばらく遠征の同胞を想へ
戰爭の福音は人をして生死の問題に
生死の解につゝしめよ
肉躰の生死に付きて安んずべき地

書ごゝろ

書道の眞心(無光)

論説

是れ國民大警醒の時機(山月子)

逸事

美なる實行の活例

給金十二圓以上
最惡室に移りける
一珍事出來したり
叔父と同居するとこなりぬ
自炊して二人の食品
四月一日某は校主に面し
三つの計畫あり
早朝なりしよし
彼人則はち茫然として待つさき
宿屋に着して二階の窓より前面を見るに
實は途中にて皆な捐てたり

小説

つまさだめ(葉末の露)

文しらべ

家康老後のをしえ(中)

時報

皇大后の仁慈○共立女子職業學校卒業證書授與式○支那服裝の日本婦人○郵便及び電信事業に女子を採用す○一女子の献納二千金○朝鮮に於ける民事上の改革○篤志看護婦人臨時相談會◎津田ふき子の略歴

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百九十三號

明治二十七年八月十八日發兌

社說

戰時雜感（上）

◎謹んで戰争の福音を聽くべし　一旦、戰かひ開けてより、感應、影響のごとし。爾來の訓化幾何ぞや。人は、之によりて國家の民たることを確認したり。人は、之によりて積極的の勵行を爲せり。人は、之によりて華柔の弊を去りたり。人は亦た之によりて生死の問題に注意したり。戰かひ斯の如くなれば、渠は一個の教育なり、又一種の傳道なり、須からく其の福音を謹聽すべし。左れば、戰士は教育者の如く、若くは傳道者の如し。人之が爲めに生命を棄つるは、豈に至大の献身事業にはあらずや。

◎大日本の愛國夫れかくの如し　見よ看よ天下の輿衆、大日本人民の愛國は斯の如きなり。之を万國に求めて、万國の何處にか此の匹儔ある。貧民も義捐する所ろあらんとせり、小兒も衣をも脫がんとせり、婦女子も弁簪を献てんとせり。軍資は裕かに足らんとす、公債の募りは直ちに應ぜられんとす、國民は皆な戰かはんことを欲する也。嗚呼、贊歎すべし、大日本國、見よ看よ天下の輿衆。わが大日本帝國愛國の氣魂斯の如し。

◎此の國は至大の國なり　此の國民は至大の國民なり。誰か謂ふ、廣袤二万四千七百九十四方里のみ、人口四千〇四十五万三千人のみと。國家の大小は、廣狹にあらず、組織にあり。多寡にあらず、團結にあり。請ふ見よ、宇内もろ〳〵の列國中、大日本の如く組織せられ、大日本の如く團結せる國民國家何處にありや。此國未だ曾て外敵の爲めに侵畧せられず、此民未だ曾て外人に膝を屈めず。開國紀元二千五百五十四年、皇統連綿一百二十一御代、優に東方に國を構えて、宇内の流轉變化を歷觀し來りぬ。試みに思へ、彼の英や、佛や、日耳曼や、たとひ驕然として方今世界に鷹睨せんと欲すと雖ども、一と度び過去の歷史を繙ときて、慚愧恨慨せざることを得べきや。其土地は、幾度びか侵されたり、其國家は幾度か顚

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

覆せり。其の人民も、其帝王及大統領も、祖國以來の系統血種を引くとありや無しや、糸よりも細く、又糸よりも脆ろく斷絶せしと、幾何回ぞ。請ふ之を我大日本に比較せよ。又試みに思へ、方今宇内の列國中、自國の國領が相ひ分離反背せんとするを歎かざるもの何處にありや。此の歎きによりて、國の組織に憂ふる所ろあり、其の組織の分裂せんとを氣遣ふの上より看下せば、國家大なりと云ふと雖ども、實は小なる耳。日耳曼、何の故に强ひて國家主義を唱ふるや。魯士亞、何の故にシベリアに國民を逐ふとを爲すや。支那の如き此點より見ば、小國のみ。英吉利の如き豈に其植民地の分離を憂ふるのみならんや、自國連島の三一たるアイルランドすら相分れんとするにあらずや。然れども、翻つて此の大日本を看よ。此國民の相ひ分裂するとあらんと想像し得るものありや、あらば乞ふ其夢中の信仰だに表白し來れ。嗚呼、如何なる想像家と雖ども、大日本國が分裂し、其同胞が相離るゝとあらんと想像するものはあらざるべし。左れば、此の二万五千方里は、一連打したる銅鐵の如し、此の四千餘万人は、血統相引く同胞にひとし。此の同胞一家甲鐵艦内に乘組み、悠々として、日本海上に浮ぶの躰、即はちこれ大日本の狀態にあらずや。左らば、宇内の列國中、如此く廣ろき國土の千古分裂するとあらざるべきものありや。又、四千餘万の蒼生万代に至るも相離るゝとあらざるべき此の大日本人民の如きもの何處にありや。此故に、國家は、土地の廣狹と、住民の多寡とを以て大小を言ふ可らず、當に其組織と團結とによりて考がふべし。もし一と度び如此く考がえ來らんものあらば、日本は即はち世界中、至大の國、至大の國民なりと云へるとを言下即了すべし。

◎此の大國民今や支那と戰ふ　言ふなかれ、支那は大國なりと。何によりて其の大國たるとを知る乎。地理は答ふ、面積、三百四十八万七千七百方里、人口、四億二千三百八十八万人と。憫笑す、此の面積、少くとも六七國に分裂せんとするは、自然の傾向にあらずや。彼の跛者の如く、彼の手枯たる人の如く、彼の中風やみの如く、もし生血、全躰に活流するとあらずんば、五躰大なりと云ふと雖ども、豈に一身を大なりとするとを得んや。支那は如此し。其人民は、同一の言語をすら有せず。其の帝王は屢々倒れ、現に數万の同志を有して、今

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の帝位をすら窺はんとするものあるにあらずや。如此き邦土何の大國ぞや。

◎左れど戰かひは驕る可らず　兵の驕るものは、必らず敗ぶる。支那、大國にあらず、且つ、國脉活通せざるがゆえに、之を討つ、一擊を以て首尾に感應せしむると能はず。これ下等生物に存するの理にして、國家の開らけざるものに免かれがたき所ろ也。左れば、之を討つて全敗究局の地に逼はんには、日を要すると短かからじ。日本すでに此の厄介物を相手にし、其の改善に志を立てたり、須からく堂々として經營し、まさに遠大の計畫を定むべし。功を早急に期して、俄かに結局を希がふべからず。此故に、農夫は、深く耕やし、商人は廣ろく賣り、主婦は節儉し、童兒は小學に勤勉し、富者は奢りを制し、勇者は身を以て獻じ、凡そ國民各々其長を盡して、久遠に、長大に、相ひ戰かふの決心あるべし。語を寄す、同胞。此の戰かひ正に一年以上と期して經綸を立つべし。支那が、此の間だに、仲裁を請ひ來らんとも、もしくは、更に意外に早く敗局に落ちんとも、そは隨意なり。但だ吾が大日本人民の經綸は、則はち當に斯の如くなるべし。

◎諸君しばらく遠征の同胞を想へ。征くものは、尙ほ可なり、前途、爽快に巨敵のあるあれば也。されど、征人の遺族に至ては、感慨幾何ぞ。妻あり、子多し、老親の老ひたるあり、壯丁此時尤とも勤勞して家を支へしに、今や乍ち國家の爲めに軍に出でたりとせよ。遺族が生計の困苦いくそばくぞ。此文の讀者は、假りに其が家の主人今朝俄然召集せられたりとせよ。而して后ち君が感慨如何ん。警告す女學雜誌の讀者。先づ念頭を斯の如く覺悟して、而して、奮發せよ、節儉せよ、同情をさゝげよ、足らざるものを救護せよ。

◎戰爭の福音は人をして生死の問題に　考着せしむ。人生の榮枯、何ものか遂に此の一大事に想當せしめざるとある。左れど、戰爭の如く直接にして且つ有力なるものは、蓋し鮮なし。砲火一閃すれば、十百の人忽まち倒る。戰爭は尤とも迅速に生死の別離を見めすものなり。浮薄淺輕の情、之によりて癒えん。人々、須からく嚴厚に、今に方つて謹しんで生死の問題を靜思すべし。但だ警告す、此際、

◎生死の解につゝしめよ　生死に對する、人の覺悟及び平安は、多くは其解を誤まるとによりて亂さる。評論子、かつて

之に慨して一家の說あり。曰く、人は素と生を好みて、死を惡くむもの也、之を天性とす。此の天性を曲げんとは難し。故に、人は死を甘んずべからず、生を希ふべし。生を希ふヿの淺からんヿを嫌ふ、尤とも切に生を思ふべし。但だ、其の生く所ろを層々段々に高尙にして、生命の種品を優等なるものとなすべしと。此說眞とに佳なり。左れど單に、

◎肉躰の生死に付きて安んずべき地　別に之れあり。請ふ試みに言はん。凡そ、平安に二種あり、積極及消極これ也。消極的の平安とは、斷念する也、思ひ切る也、通俗の所云るアキラムルが如きもの也。此の平安は未だ可ならず。平安は、當に積極的なるべし。積極的の平安とは、信望の故に平らけき也、已を得ざるが故に安んずるにあらざる也、自から期し自から進み自から待つ所ろのものあるによつて平安たる也。今ま、玆に軍に從がつて戰陣の危地に臨むとせよ。たとひ未だ戰かはざるに流丸に中つて死するとするも、若くは先登第一の功を奏して花々しく打死すとするも、既に死の來らんときには「之れ命也」と信じて此の死を歡迎し、吾が數之に盡きたりと斷念して遺憾なからんは、即はち消極的の平安也。消極的の平安亦た佳なりと雖ども、未だ足れりとすべからず。

人は生平積極的の平安なかる可らず。今ま肉躰の生死に付ての積極的の平安とは、「吾が天職を了る迄で、決して死せず」と確信するヿこれ也。人は草木にあらず、豈に偶然にして世に出でんや、造化すでに「我」を造れり、豈に此の「我」を無用の爲めに造らんや。左れば、人皆な天職あり。其の天職を盡了せざるの間だ、たとひ刀劍の下に在りとも、死するヿなし、たとひ彈丸雨注の中に在りとも、死するヿなし。此の死せざるヿを確信するを積極的の平安となす也。大人の世にあるや特に偶然ならず、精誠眞忠の胸に鬱するや、尤とも尊とむべし。此等天地間の至寶、人生に顯現して其の社會に益せんとするとき、安くんぞ其の天定の使命を盡了せずして而して直ちに世より沒れんや。此故に、「我」を信ずるヿ尤とも强きものは、「我」が世に於けるの天職未だ了らざれば、決して死するヿあらずと確信す。此の確信あらん限り、決して死せざるもの也。此の死せざるヿを更に確信するを積極的の平安とす。凡そ、勇猛奮勵して激甚の戰ひに入らんとするものは、尤とも切に此の種の平安なかる可らず。外に出でて劍戟煙塵の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

中に戰ふとき、これ也。內にあつて革新革命の事業に戰ふとき、亦た是れ也。

（清韓事件）日本基督敎徒同志會

東京府下各宗派の日本基督敎徒は、近頃ろ相盟約して題名の一會を組織し、其下に協和合力せんとを決議したり。決議案に云く、

吾人は此時に際し福音の旗下に同志の力を併せて爲すべきものあるを信ずる也、即はち從軍者の疾病創傷醫療の事從軍者の家族又は遺族及び戰亂より來る窮民の賑恤等は主義と塲合とに於て尤とも適當に尤とも平安なる事業とす。

各派の合同頗ぶる佳、冀はくは全國相應じて、同一主旨の本に相連合せよ。

然れども、國民として社會に對するとき、豈に信徒不信徒の別あらんや。凡そ今回の如き塲合に際しては、國民可成く相分れざらんとを要す。郡區市町村の組合の如き分數によつて而して以て多を治めんとするは則はち可なり。極めて切要不得已ざる事にあらずんば、政黨によりてだに、相分るべからず、況んや宗敎に於てをや。左れば基督敎徒は一般國民として爲し得べき限りは、國民として盡すべし、別にクリステアンたるの旗幟を此際に建てんとを要すべからず。

左らば、日本基督敎徒の團体は、別に會同合力するの必要あらざる乎と問へば、否と答へん。吾人が言ふ所ろのものは、國民として言ふのみ、國民としては一般國民と共に運動せよ。もし特にクリステアンとして合同せざる可らずとせば、當にクリステアンとして別に施こさゞるを得ざるが如き事業の爲に盡せよと言ふ。

嗚呼、日本基督敎徒として盡すべき事業多し。彼等之に任ぜずして誰か當らん。一言するに、尤とも聖なる意義、尤とも棄られたる民、尤とも隱れたる事業等は、大率ね世人に忘らるゝ所ろのものなり。基督敎徒は、則はち此邊に力を獻げざる可らず。

先づ一事を擧んか。有志耐任の人、兵に從がひて、從軍傳道及び慰藉の事を爲さずんばある可らず。戰かふに義に、死す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るに平安ならしめんが爲め、傳道を要す。負傷者、臨死者には、殊に慰藉と温護とを要す。此等の爲めに、特に從軍するものは、基督敎徒にあらずして誰ぞ。

軍に法あり。彼の有志の婦人、從軍看護の事を出願するものありと雖ども、未だ許されざるが如く、右に擧たる一事の如きも容易なる詮議の外にあらんとす。然れども、實を期して名を避け、精神を陳露して、何如なるかの事務に役するとせば、從軍決して難きにあらじ。

此事の爲めには、至重なる任選を要す。左れど、任選に先だつては、自個が熱誠の覺悟なかる可らず。語ばを呈す、未知無名の獻身者諸君、請ふ徐むろに思慮し、靜かに祈つて先づ大ひに決する所ろあれ。

本號以來、下に掲初する「畫ごゝろ」の一欄を置き、文壇の新客、社友無光子に此を全任す。子は、多年、畫道に思をひそめ、自得自發する所ろ、尤さも多し。密かに當今の丹靑に對して、所懷、所慨、頗ぶる大なりさがや。吾人、太たく同情を呈して、此の深修の士が、所信を世に發表せらるろの道を供ふるとを樂しむ、讀者は、將來、高雅、神聖にして、俗論さ大ひに懸隔せる鮮新の畫敎を緻々さして聞くとあるべし。

畫ごゝろ

畫道の眞心

無光

クリスト小兒を指して爾等此の如くならざれば天國に入ること能はずと宣ひぬ、されば徒らにかげろふの如き智識を誇り朽ち果つる名聲を望み意味も無き外形に執着する者はクリストの最も戒め給ふ處なり、凡て小兒は眞率にして僞りなく其一言一行眞の心の底より出づるが故に其誤れる處至らぬ處あるにも關らず誠に愛すべく誠に貴むべきなり、此眞心は實に人の生命にして余等は此生命に餓ゆるものなり、

自然に生長せる樹木は素直にしてゆがまず勢ひ摧けずして生氣充ち少しも窮屈なる處なし、植木屋は枝を矯め葉をすかし猶飽き足らず繩を以て縛ばり棒を以て壓さへ色々樣々に苦心して天然をそこなう、人も亦頻りに其巧を譽めそやし此振り彼姿と其丹靑に感服す、日野資朝卿が雨宿りして不具者の集まれるを見て初めて覺り是迄愛でられし植木どもを盡く棄て

られしといふ話あれど心あるものはげにさもあるべきことなり、色々面白しくと殊更に心をひねる故にあれもいけぬ是もいけぬと自分勝手に曲がりたる理屈を付けて利巧振るに至るなり、誰しも清き心は有るなり、只心を沈め氣を靜にして邪念を去れば自然の理に協ふべし而してそれよりして眞の智識工夫も出で來らん、

或人小兒を畫ける畫を余に示しためいきつきていふやうこは誠に疎末なる筆なれども何の畫風とか何の筆法とかいふ植木屋的の細木に縛られずかくしてあゝしてといふ殺風景なる理屈にも曲げられず只一心不亂精神こめて筆を執れるもの故に美神も天降り給ひて斯る妙品を作らしめ給ひしなるべしこの儘にしてたゞに發達しなば遂には天をも摩すべき大木ともならんにアヽ是も遂には植木屋に見出されてあらぬ片輪に爲されんかと、これいつはりならぬ事なり、偏に奇を好める言葉には非るなり、小兒の筆に成れる此畫は誠に余等が手本となすべきことなり、畫を學ぶもの少しく物心つき位置の配合とか濃淡の釣合ひとか彩色の調和とかを覺ゆるに隨ひて單に面白くせん甘くせんといふ悪魔の試みに誘はれて幹と枝との區別を誤まり榮養分は枝葉にのみ奪はれて用立つ材木にはならず終に美神の御手に切り去られて竈の下の烟と消ゆるなり、余等も此悪魔に誘はれぬやうにのみ心掛くれど中々に我心と云ふものゝ强くして素直の位を保つこと難きなり、されば此畫を示されたる人は余は畫學子弟を養育するに邪道に赴かざらん限は決して斯くすなと禁めまじ所謂畫法なるものを敎へまじ其發達するに任せん余が務は唯其勢力を付けやるにありと叫びぬ、

此覺悟は子弟を導くに大切なるのみならず、畫道の原理大本は實に此外に出でざるなり、常に此中に在りて進むを得ば他は求めずして自然に來らんのみ、宇宙の萬象目に見ゆるもの盡く畫の材料に非ざるなし余等清き眞心を以て是に對する時いかで畫法なるものあらんや、此眞心が我心我欲に礙罣せられず自然に畫幀上に顯はるゝ時即ち人の魂をも奪ふの名畫とならん、つまり總ての畫論も總ての畫法も古人の作を臨摸するも實物を寫生するも皆此眞心か我といふものに礙罣せられざらん爲めの脩練に外ならざるなり、畫法として別に畫法なるものあらざるなり、己が眞心一徹して滯らざる是れ即ち畫

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

法なるなり、彼の小兒の畫は未だ發達せざるものにはあれど其すぐ〳〵としていじけず飾らざる處は穢れたる巧なる所謂當世大家の傑作よりは遙かに上に位するものなり、後者は巧なり然れども巧なるだけ穢れたり、前者は拙なり然れども其拙なるだけ清きなり、若し此清きものが變化自在に飛行運動して天地と其趣味を爭ふに至らば是れ實に神品直ちに美神の右に座するものなり、清きものは此榮えの冠を望むで進むを得べし穢れたるものは遂に救ふ可らず、クリストが爾再たび生れずば天國に入ることを得ずと宣ひしは此意なり、

畫道と宗教と豈に二あらんや、畫道と宗教のみに非らず、あらゆる學問技術も此眞心の外に出でんや、只其顯はるゝ方向働く場所を異にするのみ、此眞心は余等の眞心なり而して又直ちに宇宙の眞心なり、眞心二あらんや、されば余等と宇宙と二あらんや、此境即ち美なり善なり眞なり、畫道の本意實に此處にあり豈に然かく六ケ敷からんや、然れども六ケ敷ものは六ケ敷からずして六ケ敷からぬもの六ケ敷なり、若し實際是を己に體するに於て然かく六ケ敷からぬものあらば誰か岐蹊に迷ふものあらんや、六ケ敷が故に人多くは其路を誤まる、進むに隨て益々分かれ路多し故に益々迷に入る、天は一分の管を以てして猶ほ仰ぐべし、處として天を仰ぐべからざる處なし、而して天は何ぞといはゞ誰か是に答ふるものぞ茫として際無く漠として捕ふるべからず、天なるもの果して何ぞ、其大さを知らず其深さを知らず其色を知らず其性を知らず、只認めて天とするのみ、天は最も見易く最も見難きものなり、此眞心亦此の如し畫の道亦此くの如し、見難し、故に迷ふ、見易し、故に覺るべし、心清きものは終に覺るの期あらん、

畫道の眞心是を小にすれば彼の小兒の畫にも顯はれ之を大にすれば雪舟アンジエロも遠く至らざる處あり、素直高潔といふは之を小にし之を一に歸して言ひ顯はせるのみ其宇宙に通じ萬象に融ずる時に至ては窺ふ可らず測る可らざるものとなるなり、譬へば之を余等の腦裏に畫き出さんにも一歩進めば一歩高大百歩進めば百歩高大なり、恰も天界の星は余等認めて豆よりも小なりとするも千倍の望遠鏡を以て望めば千倍大にして且つ遂に萬倍なれば彼も亦萬倍し其最なるものは人間が到底其距離大小を想像すること能はざるが如し、然れども

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之を認むることは明かに認め得るなり、余等明かに其物を認むるに相違なきなり、此眞心も是の如し余等其際限を知ること能はずと雖ども慥かに其眞心なるものを會得し得るなり、余等其途に進みつゝあるなり然れども前途計るべからざるもの有るなり、余等は徒らに空想に走る可らず、筆を執て畫幀に對する間に於て此眞心に入るべきなり、余等は畫道に歩むものなりされば畫を放れて所謂眞心なるものなきなり、其畫の巧拙といふは(余等の意味に於ては)畫幀上の此眞心の働き顯はれたる度の高低廣狹厚薄をいふなり、

眞心が或一の途即ち目的ありといひ而して巧拙は其目的に進む途に於ける種々の度なりといふは古來の畫工は皆單純なる同方向に進み居るといふ意味なるか、曰く然り、然れども此一の目的といふは狹き一の途に進むの謂には非ず、畫道に於ける此眞心は恰も人間といふものが此地球上に生れてより今日に至り今日より未來永劫に渡りて一の人間の目的といふものに向て進む間には縱に橫に無數の變化異動あるが如し、即ち邦國の異なる時代の異なる野蠻文明の差別、治亂興敗の差別あるが如く洋の東西時の古今に起る趣味の別あり流派の別あり手段の別あり畫題の別あり是を細にして人々箇々別々なり一人に付ても又時々刻々別なり而して余は此千萬無量の差別を貫て眞心なるものありといふなり、

余は思ふ此眞心は實に畫工の生命なることを、こは即ち美神の精なり即ち美神夫れ自身なり、畫工が此生命より放れて獨り行くときは枯死せんのみ、こは凡て余等の奧底にひそみ居るなり、唯外物に蔽はれて其光を放つこと能はざるのみ、筆彩の間に余等が工夫するは余等が心の奧に有する其光を放たんことなり、西洋畫日本畫彼派此派等の表面の差別に迷はされて此眞心を認むることを得ず又之を要めざるものは未だ畫の本意を得たるものに非るなり、

余は爰に眞心と名づけたり、されど名は何れにてもあれ、余は唯余が畫を作りつゝあるとき又天地間の萬象(人物花卉動物其他一切を指す)に對する時余と彼等と兩々調和せる間に於て心の眞底より湧き出づる一の靈泉あるを認めて假りに之を眞心を名づけたるのみ、こは誠に畫道の大本なりと余は信じて疑はざるなり、如何に巧妙精緻に筆彩明暗を弄し實物を寫し意匠を凝すとも此第一義に餓ゆるものは健全なる畫とな

すこと能はざるなり死美人は如何に形姿麗しきも美とするに足らず寧ろ其麗しきだけ不愉快なるが如きなり、畫を學ばんとするもの最も此心を養ふを要す、技術上の修練工夫は随て出で來らんのみ、此眞心は宗教信者が或は神に或は佛に或は天に對して抱ける一種言ふ可らざる妙趣と同く畫工が其妙作を畫き出すに於て最も大切なる神秘的の妙趣にてあるなり。」

斯く縷々として舒べ來れば畫道は一種の神學の如く見えて技術とは見えずといふものあらん、然り是は畫道の心學なり、此眞心目に映ずる萬象をかりて或は青空一碧拭ふが如く或は黒雲慘憺として電雷天地に震ふが如く或は春雨の如く村雨の如く灼々として日の如く玲瓏として月の如きの趣を畫幅上に現ず是に於て初めて目に見るべき畫となるなり即ち爰に於て畫術なるものあるなり、故に眞心其ものは畫に非るなり、其働く作用は無限なり、平和となり怒となりまめやかになり物すごくなり盛となり靜となりて人物を假り景色を假り動物花鳥草木を假ることゝなり、言を換へて曰はゞ眞心は靜なり體なり技術は動なり用なり、眞心之を放て古往古來無數の貴き畫となり此無數の畫術之を收めて一の眞心に歸す、本立て道生ず、眞心之を己に體して畫道生ず、畫道として別に畫道なるものあらざるなり然れども畫道を放れて別に眞心なるものもなし、深く畫道を研究し筆彩の間に於て工夫焦心するに非ずんば此眞心遂に得べからず、徒らに空想を抱て畫道の本旨を得たりとせば是れ大なる誤なり、余等が技術の末に走りて其本を失ふを戒めざる可らざる如く空しき忘想に走りて技術の修練を怠り輕んずるの弊は亦最も避くるに務めざる可らざるなり、要するに眞の畫道に入らんことは常に彼の小兒の心を失はず孜々として畫を作る間に在るなり、

論説

是れ國民大警醒の時機

在仙臺　山　月　子

豐島海上、忽然として砲聲轟く、人死し、船沈み、清は敗し、日は勝つ、是れ日清最初の開戰、爾來戰雲海を蔽ひ、殺氣天に冲る、成歡の軍、牙山の戰、共に日兵の勝利となる、然れども海上第二の戰は如何、清の北洋艦隊は今何れの邊に在る

や、清の陸兵は鴨綠江の近傍に顯はれ、朝鮮の東學黨は日兵を撃つを名として起たんとす、今後の形勢果して如何、國民は襟を正して此國家の爲めに思はざるべからず、

徳川家康曰く『勝て兜の緒をメむ』と、彼が成功の秘訣此に在り、希くは國民をして驕らしむること勿れ、吾人は今の新聞紙に向て、其浮華の筆を弄して、如今在韓の同胞は、炎熱燒くが如きの處、波濤怒號するの處、其血を流し骨を碎く時に於て、内地の人民をして、半ば祭禮の如く、踊り狂ふが如き狀況に至らしめざらんことを望む、吾人は新聞紙の調子をして、謹嚴、正大、堂々たる風あらしめんことを願ふなり、

昔しは國家戰爭の時に當り、イスラエルの愛國者は、起て其國民の不義を責め、正義の精神を奮起せしめ、此精神を以て奮て劍を取らしめたり、而して敵の猛兵を打碎けり、

英國のナポレオンと戰ふや、英の平民は、一層の勤勉を以て富を造り出し、以て其軍費を支出し、而して其勝を全うするに至らしめたり、

夫れ宇宙は正義の法則に由りて支配せらる、正義の向ふ所、天下に敵なし、世界は勤勉の手を以て征服することを得、富の力は結局の勝敗に關す、國民をして勤勉ならしめよ、國民をして正義ならしめよ、既に正義に已に勤勉ならば、何者か能く我に敵せん、

日本は戰の名に於て義なり、日本兵士は義の劍を拔き義の砲を放てり、此時に於て日本國民たる者、宜しく己の位置を知り、職分を知り、敬虔に、正義に、勤勉に、節儉に、心に於ては、眞に海外の軍人に同情を表し、之が爲めに天地神明に祈り、行に於ては、其能ふだけ十分に富を造り、以て軍費を豐ならしめ、而して一旦緩急あるに於ては、義勇公に殉ずるの覺悟を持たざるべからず、

今日は妄りに一片の新聞紙によりて、傲然浮華の境に遊ぶべからざるなり、新聞紙は檢閲條例の下に在り、其記すべきことを記すると共に、其記すべからざることを記せざるを知らずや、

國民よ、愛する國民よ、吾人は切に爾に勸告す、今は眞に大警醒の時機なり、爾の内心に反省せよ、悔ゆべきは悔ひ、改むべきは改めよ、而して行に於て其悔改の實を顯はし、其忠實義勇の實を發揮せよ、

日本　皇帝陛下は、畏くも　勅語を以て、

爾有衆の忠實武勇に倚賴し速かに平和を永遠に克復し以て
帝國の光榮を全くせんを期す

と宣へり、陛下は實に吾人臣民の忠實武勇に倚賴し給ふなり、嗚呼何人か感泣に堪へざらん、吾人臣民たるもの、內に省みて忠實武勇の實を顯はし、以て　叡慮に答へ奉るべきなり、

抑も眞正の忠實武勇とは、其人間たるの、國民たるの品格を高くすることなり、赤心を以て己の義務を盡すことなり、英のネルソンは高義の士なり、ツラファルガルに佛の軍を破り、凱歌聲中、身銃丸に中りて死せんとするや、從容として『天に謝す、余は義務を了へたり』といへり、其心何ぞ美なるや、

國家の戰端を開ける時、其精神をして公義ならしめず、其品行をして端正ならしめざる者は。忠實武勇に非ず、

新聞紙が報ずる戰勝によりて、其心を驕らしめ、己が職業に勤勉を減ずる者は、忠實武勇に非ず、

警醒せよ、千島の端より、琉球の端に至るまでの人心をして、敬虔ならしめ、義烈ならしめ、勤勉ならしめ、節約ならしめ、忍耐ならしめ、眞勇ならしむるは、是れ今日の急務なり。

逸事

●美なる實行の活例

九州の或る地方に、むかし二万石を領せし藩主の舊領地ありけり。政度調のひ、士風治まりたる名殘りとて、君臣の間だ柄、今もつて麗はしく、上下一和して、團結の力つよく、何事も圓滑に行はるとかや。征人某、四方を旅びして、或る年此のあたりを過ぎ、風俗の敦厚にして、趣むきの特色あるに心うたれ、賛歎して京に歸り、其後、偶然此地の學校に一教員を要すと聞きて、こゝに其が逸事を物すべき某と云へる人を推薦しける。抑そも、此の學校は、舊藩傳續の遺物にして、系統二百年にこえ、我國最古の學館の一つなり。ことには、人情風俗、前に述べたる如きの土地柄なれば、この學校よりして感化を及ぼさんには、影響至つて大に又至つて深からん、職任一教師の役に過ぎずと雖ども、責めは極めて重からんとて、扨ては、彼の某なる人も推薦せられ、亦、某も奮

然として起ちぬ。則はち二年在勤して用を盡すべしとて、今を距る正に二年前の夏、彼地に赴任せられける。

給金十二圓以上

二十圓迄を出さんとの招待なりしに、某は自から約して、最下額と定めたり。到れば、則はち書生と同宿することとなりぬ。初めは、某のみ特に二階の一室を用ひしが、他に較べて稍や清潔なりとて、後には書生を悉とく其内に入れて同席せしめしに、究屈を感じて、うちくつろがぬ躰なりければ、ハタと悟りて、其が下の稍やむさくろしき方に移りしに、同宿の人増加して、久しからず、席足らずなりければ、遂には其室をも明け渡して、自己は入口の

最悪室に移りける

扨て、彼の十二圓金は、三分して、其の一を以て自らの用に宛つることとせり。即はち、六圓は、母に送り、三圓は、從前助力したる某女學校に寄附し、殘三圓を以て一と月の支給と定めたり。食料、大率ね、一圓九十錢乃至二圓二三十錢。あます所ろ、僅かに一圓内外に過ぎざりしが、某はもとより之にて優に生計したり。然るに、去年八九月の頃ろ、

一珍事出來したり

もと某が叔父に當る放蕩無頼の人あり。十五六年、郷里を出で東西に放浪し、近頃ろ壯士の頭分となりて壯士演劇を催ふし、地方を其處より彼處へと流れ渡りけり。長州山口にて演劇を興行するとき、彼の人何事にや惡徒にいぢめらるゝ所作を演しつゝありき。此時つく〴〵と相方の惡徒を見れば、殘忍酷薄にしてふて〴〵しき爲躰、惡さも惡しと瞥一瞥しつゝふと反省すれば、こは抑も、此の惡徒宛然自己が平常を活演しつゝあるに異ならず。俄然本心覺醒して、良能一時に驚ろき、直ちに決して何事も棄て置き、單衣一枚のまゝ出走して、あえぎ〳〵從子なりける彼の某が許に着して懺悔するやうは、今にして初めて十五年の大非を悟りぬ、願はくは飜然改悔して、我ほどの惡人も、善人となることを得べしとの活ける實例を示さん、殘生を夫が爲めに獻じなば万幸なり、故に汝が許に住ひて、聖書一巻の研究することを許せと則はち

叔父と同居することとなりぬ

塾舍の傍らに粗末なる家ありしを借りうけ、玆に同宿はせしが、二人の食料を得べき餘裕のあらざれば、何如にせんと思

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ひ煩らひぬ。然れど、好き方の得られざれば、塾の賄に命じてたゞ一人分の食品をのみ用意させ、之を叔父にのみ給して自己は食はざりけり。但だ小遣錢少しくありしかば、日に日に二錢の飴を買ひて食用し、凡そ九日を過しけるとぞ。左れど好き方法の倘ほあらざれば、別に科業外の敎授を爲しつつありし通學の一書生に懇談し、用あるにより自今毎日握り飯一箇づつを持參しくれよと賴み、之を食らひて凡そ二十日ほどを過しける。時に一日、彼書生は重箱二箇に山々の馳走を詰め、親戚より貰ひしゆゑとて持參したり。蓋し此時初めて實情を探知して、かくはもてなせしなるべし。某も亦た然なりと知り、つく〴〵と思ふやうは、吾が親戚に助けせんとて、反つて他人の助力を受くるは、宜しからずと。則はち、此日より斷然、彼の握り飯の持參を謝絶したり。其后は、樣々に工夫し、遂に彼の三圓金をもつて

自炊して二人の食品をやうやくに準備したり。彼の叔父、日に日に靈化はすれど、十五年の惡習容易に脫せず、折々あともどりして歎かはしき事もありしよし。然るに、某は、本年三月學年の了ると共に一たん解任を乞ふの期限とし、万事を其の豫算によりて、着々處置せしかば、三月三十一日限り、叔父も自から其后の方法をつけられたしと兼てより申出で置かれしとぞ。左れば、此日となり、午后夕べに近づくころ、叔父は去年着用して來りし折りの單衣に着換え、湯を沸かして之を大だらいにうつし某を招きて、半年の恩を謝し、彼の救主が例にならひて、其足を洗はんと請へり。懇求もだしがたければ、某は遂に足を洗ふとを聽しけり、叔父は、其夜出立して、みち〳〵舊知及び擊劍家などを訪ひ、自己改悔の由縁を懺悔して、道程をすゝめ、十六年目に故鄕に歸りて、叔母と室を再たびするよとなりしとぞ。翌る日、

四月一日某は校主に面し辭職の事を申出しに、可かれず、少くとも更に一學期を延されよとありしが、此時同宿中の一書生品德未だ修まらず、頗る掛念せらるるにぞ、即はち諾して更に七月迄留まることとなし、つら〴〵彼の書生を熟視するに、第一、賄方に負債多く、浪費太甚しき躰なれば、三月迄と定めて寄附せし方の三圓金は其后此の負債の方にまはし、且つ、彼の書生をして成

べく他の書生と交はらざらしめんが爲に、某自から常に近く接し、之を敎化し、遂に本年七月となりて、最早何事も遺憾なき迄となりて、則はち彌よ辭職したり。某は、其の力の爲し得る限り、其誠の露はし得る限りを了えたり。此上はたとひ留まるとも、繰反すに過ぎず、もはや留まるべき必要あらずと信じ、固く辭職したり。もし辭職せば、此の辭職によりて、又其后に現はれ來るべき事によりて、反つて益を呈すべしと信ぜし也。左れど、校主の懇求たゆるとなく、遂には「今にして學校を棄つ、學校を愛せざる乎」との問を受て、之には大ひに迷惑せしとぞ。抑そも、某は、辭職后に爲すべき

三つの計畫あり

第一は、北海道某所の監獄に敎誨師として懇望せらるゝに應ぜんとて也、某は言へり、敎誨師は、單に說敎を以てすべからず、自己も亦た監獄內に入り、囚徒と同一にくらし、又其の職業を共につくし、斯して同情同態の間だに敎誨すべし、我もし任に當らば斯の如くせんと。第二は、琉球に傳道して、聖書を其方言に譯せんと也。第三は、西洋人に傳道せんとなり、某は言へり、西洋人は一個人として基督敎徒らしきもの多くあれど、其國は未だ基督敎國たらず、渠の如き富と勢力とを以てして、眞とに基督敎國たるとあらば、天下を益すると大ならん、然るに尙ほ其實なきものは、傳道の足らざるが故なり、余は、其の大學校の門番となりて、生計し且つ學び、以て西洋人に傳道せんと欲すと。凡そ、此の三つのものと、更に留任することを比較して決せんとせしうち、故ありていよ〳〵迫られ、遂に留任するとゝなりけり。左れば、今日迄の二年間は、初めに推薦せし人の附托に原ひせしとて、茲に則はち其約を釋くべき也とて、近頃ろ京に上りて二年間の大畧を報ぜられしとかや。此人を訪へる折には、

早朝なりしよし

一日相話して、さて共に出でんとして、彼の人の尋ぬるよしは、都を距る三里、かゝる邊鄙の地なれば、尋ね玉ふに困り玉ひはせざりしやと問ふに、某は笑つて初めて實を告ぐるよう、咋夜、都より步して到來せし頃は、すでに夜一時なりし、所々を聞きて尋ね當らず、遂に一夜をとある茶店の露台にてあかしぬと。其の自から語らざると斯の如し。且つ、歸向の旅費は、暫ばらく借らんとの事にて、彼人は之を都合し、持

參して共に京には出でしが、其夜、某が定めたる宿りに泊すべしと約して、途に相別れ、夜十時ごろ後れて彼の宿りに到れば、某はあらざりしとぞ。

彼人則はち茫然として待つとき

宿の主婦來りて、唐突語るよう、某さま御着後、其日の夕方お拂ひを請求せしに、五六日滯留するに付、其後に拂はんと仰せあり、されど曩の日、大ひに迷惑せしとあるにより、お拂ひ下されずば御泊め申しがたしと言ひしかば、左らば知り人の許にゆくべしとて、前晩、御出ゆきあり、今夕歸られて後刻又は明朝拂はんと仰せありしが、前の如き事情あるによつて御斷はり申せしにより、左らば暫らく出で行かんとて外出し玉ひぬ、如何に爲さんやと言ふ。嗚呼、婦人、此の義の人を知らざると如此きかと、切りにうらがなしく「彼の御方は左樣の人にあらず、早々にさがし來れ、又、わが斯る事を聞たりとは知らしむる勿れ、吾も聞かざりしとせん」と言ひ、何たる氣の毒の事よと數度び嗟歎するうち、一時間を出でず、某は莞爾乎々として、歸り來られしとぞ。則はち、相ひ話して一と夜を明かし、明朝も亦た人生を談ずる折、某は、

人事の極致、愛にある所以を論じ、もし此の所ろに心を存して、万事の所行を其の修養に練らば、如何なる機會にも、平和安心を得て、自得綽々たりと辨じつゝ、扨て笑ひ乍ら一例を打あけ玉ひしとぞ。其の例とは、即はち、宿屋の主婦に迫られたる事にぞある。某、言はく、

宿屋に着して二階の窓より前面を見るに

かなたの隣家の一人、椽側に出でて、切りに歐吐し悶苦するの態なれば、所持せし寶丹を投げ與へたるに、中途のヒサシにとまつて屆かず。其うち苦しめる人も治まつて室に入りしかば、安心し、宿の下婢を招きて、かしこの藥を取りくれよと命ぜしに、太はだ不審の樣姿にて、此時より扱かひ急に變はり、其夕方、お拂ひをと請求せり。然るに、持合せなく、後に都合せんと思ひしかば、斷はりしに可かず、さらば持參せる衣服を隨意に扱かへよと言ふに、そは曾て壯士にユスラレタリとの一例を擧て、すべて衣服は預からずと言ふ。事情を聞ば、尤もなるにより毫も惡感なく、今夕も亦た一たん歸りしを、主婦が推出に、凡そ女にして一家を料理するもの、かほどの了簡なかる可からずと思へば、反て氣の毒にて、さぞかし其强行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が心苦しからんと感じて、早々に出でゆきたり。かねて旅にて金に困するの究状を聞き、何如なる事やらんと試ろみしに、之も亦た異事にあらず、もし心衷、愛の覺悟あらば、毫も怨みなし、たゞ修めたきは、此の覺悟なりと言はれしとぞ。左るにても、何故へ、然か金には困し玉ふとなりし。然か承知せば、夙く、都合せしものを渡す可りし事と、彼人は申せしとぞ。某、更に微笑して、

　實は途中にて皆な掏てたり

汽車中にて、夫婦と子三人づれの一行あり、伊勢の國にて、かせぎ居たるに、東京の師團にて近日招集あらん、歸京して待ち居るに若かじとの事にて、此日歸京の途にありしが、横濱にて、中途下車し、數步出でゆきて、慌たゞしく歸り來り、金囊を失なへりと言ふ。則はち大騷ぎしてさがすに、見當らざりき。悲しむべし、其内には、貯金二十圓の驛遞局預け帳、實印、小遣錢、鐵道切符、荷物の預かり札などありしに、總べて盜まれて如何にやせんと歎ずるにぞ、某は之れ不可不救として、飛び下り、慰さめ、さとし、驛長に談判し、電報を打たせ、兎に角、東京新橋ステーション迄で連れ來りて、其の驛長にかたり、保證し、乘車賃の事を都合し、又驛遞本局に屆け書など出したるに、即座錢なくして、幼兒等、餓に泣くの樣を見たれば、持合せしものは、悉皆與へたりと。此時はじめて實を明かされけり。

某の爲す所ろ、常に斯の如し。其の學校にあるや、學資に困する人に、己が學資を給し、自己は早朝牛乳配達を爲しつゝありしが、彼の學資を受くる人は、二三ヶ月此事を知らざりしとぞ。平生、かくの如くして、人に示さゞれば、其の全豹を知らんとかたし。以上の逸事も、必要ある都度々々にやうやくにして陳露せられしものを一つに集めたるに過ぎずとかや。左れば、茲に斯の如く筆記して公けに示すは、某が固より好まざる所ろならんが、如此き善行は、公共の教とすべし、決して沒す可らずとて、扨ては聞けるが儘を筆記して示す。事情、如此くなれば、固より某の名は明記しがたし。されど、一々實事たるとは、言ふ迄もなし。此記の筆者は、其實名を世に公けにするの日あらんとを望む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

つまさだめ

前談　　葉末の露

妻は死せり、わが意中の妻は死せり、嗚呼天なんぞ無情なる、わが命とたのみし人は、今や、流の水屑となりけるなり、いでや、我もおくれはせじ、あはれ、わが秘藏の無銘の一刀よ、このせまき胸に、汝のきれあぢためしてくれむ。

あゝ、さりながら、我いま死なば、老いたまひたる、父上、母上を、誰かやしなひ奉らむ、それをおもへば、あだに死なるる命にあらず、嗚呼まよふたり、我は今、死するあたはざるなり、死なざらんか、吾心をいかにせむ、死なむか、わが父母をいかにせむ、父母をおもひ奉れば、とても死なるべきにあらず、戀人をおもへば、ながらへがたし、嗚呼まよふたり、戀人は、もはや、この世を逝りたるなり、逝りたるものを追へばとて何かはせむ、父母はなほいますなり、在すをすつるは不孝なり、げにも不孝なりけり、嗚呼我あやまてり、あだにすつべき命かは、孝は百行の基とさへいふなるに。

さはさりながら、あぢきなの世や、この苦しき心をいだきて、空しく光を消し行るべきか、阿那うたて、よしや、この後、十年、二十年、三十年の命。

嗚呼、わが妻よ、戀人よ、おん身とはじめて相見し時は、我は十二、おん身は八の春、かの賀茂川のほとりの家にて、手習せし時なりき、さても、いかなる契か前の世にありけむ、相見しより、なまめかしき戀にはあらで、忘れがたく、捨てがたく、朋輩にからかはれては、腹立しくも、嬉しくもおぼへつ、おん身も、我も、はらからとてもなく、二人のほかに深く交るべき友さへなき身の、いとむつましく、おもしろき春秋、くらしけるに、はかなや、我十七の秋、父母と倶に、住居を此所に移すべくなり行きて、あだならぬ戀も別るゝにつらく、あすは出立といへる夜は、夜もすがら悶へあかしつ、旅にいでゝも、うしろの方のみ戀しく、金閣、銀閣の家根、さては、馴れにし京の山々の姿、霧にかくれ、雲に消えにしも恨めしく、見ゆるはおん身のおも影のみにして、東海

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

道五十三驛の風景も、いかにありしか我は知らず、やがて着きにし東の都は、故郷を去ること百三十里。

それより、まなびの窓に在りて、机に對ひては、そのむかし、おん身の手を持添へて、この點は斯く、そのはねはしかなりなど、手習せし時を、そゞろに憶ひいだして、戀しく、あじきなく、心は飛ぶ西の空の都、をしや花の散る嵐山の春の夕、涼しの風や賀茂川の夏の夜、秋の日影に通天の紅葉、冬の朝に圓山の雪、いつまでも、倶に、ふたつの影をうつすべしとおもひしはあだにして、あはれや、今は、西と東の都にひとつ、月を看、ほとゝぎすを聞くにさへ、何をかなしたまふらむ、いかなる心にておはすらむ、あはれ、そのおん顏の、いよゝ愛敬づきて見えたまはむなど、おもひまゐらせては、上野隅田のながめにも、たゞ戀しさのまさり來て、いと堪へがたくぞおぼゆなる、あはれ天翔る鳥よ、汝の翅をしばしかせかし。

四年の月日、はやく過ぎて、我、二十歳の夏のをはり、父上と倶に、墓參のために、わが戀の故郷に向へり、あゝ、わが戀人はいかにしつらむ、こたびも、道の邊の青松白砂、あるは名物の何々、それらは皆、わが心にあらず、たゞ何となく、あはたゞしくて、あすは山城の境にや入る、あさては嵐山の姿や見ゆると、一里も十里ともどかしく、やがて、故郷の都に着けば、いづれもなつかしからぬは無く、賀茂川の流は、むかしにかはらず、姿を映す岸の柳も、老木ながらにそのままなり、父の知りたる人の家に宿りて、久しぶりなればとていと厚くもてなされ、この夜は、人々にとゞめられて、宿をいづることかなはず、空しく過せし夜一夜、戀のかゞり火むねに燃しつ。

明れば、墓參に行きて、讀經の聲など聞きつ、其事はてゝ、我一人にて、知己を訪ふことをゆるされて、こゝろうれしく、四年があひだ、つもる思を、まづ何より語らむ、あれよりやすべき、これよりやすべき、さても、いかに我をば見らるるやらむ、さぞな、かの人のおも影の、愛らしくぞ見ゆべき美しくぞ見ゆべき、かゝるおもひに足輕く、いそ〳〵と行く賀茂川のほとり、たちまち、我を呼ぶものあり、誰にやと見れば、その人なり、忘るゝひまなき其人なりけり、此所へはいかにしてと問へば、君の來たまひしを知りて、おもはずも

さまよひいでゝ、この柳の下に、幼きむかしをしのびつゝといふ、寔にも、この柳なりけるよ、水鏡うつして、むつび遊びし折ぞ憶ひいでらる、さらば、此所にてこそ語らはめ、いざとて、その根に腰打かけて、むかし今を言ひいでゝは、泣きぬ、笑ひぬ、笑ふは素より樂しく、泣くも亦うれしく、そゞろに夏を忘れにけり。

かくて、十日がほどは、日毎に、かの柳の蔭にあひて、たのしきものから、日のいつも短きを歎きぬ、嗚呼、この時より、二人が中には、はづかしといへるおもひの、起り來れり、むかしの幼き戀しき友は、いまや、あやしき戀の友となりけり、げにも、彼は女の十六となりけるなり。

されば、いよ〳〵、こがれにこがれて、またもや、西と東と別れむことこそ堪へられね、されど、留まるべくもあらぬ身の、また父上にひかれて、またのあふ瀬を契りつゝ、わかぬわかれをわかれてより、あはれ、たちそう戀のけぶりの、世に消えやらぬ、わがおもひかな。

世は、うたゝ、あぢきなく、枕にのみ憂さを語りつ、西の空のみ戀しくおぼえて、たゞ何となく、そなたのみこそながめられけれ、かくて、また一年過ぎ、二年過ぎて、去年の夏、また、はつ雁もきこえねど、戀しき方より、たよりあり、飛立つばかりに、手に取れば、はや、その人なつかしく、いそぎ、封押切りて、讀み下せば、あら、うたて、かの人の父は逝れぬ、今は、まゝしき母の手にありて、この後、いかになり行くにや、心細きかぎりなりと、嗚呼あはれなり、されど、我も、まだ、部屋住の身にしあれば、なすべきすべもなくて、むねのみいたく悶へつゝ、また一年をすごしてけり。

今年も、はや、夏とはなりけり、庭に打水して、涼しき風をむかへつゝ、穿く下駄輕く、そゞろあるきの折から、また、なつかしきたよりを得たり、墨の色さへゆかしくて、いかなることをやかき送りけむと、燈火の下に、くりあけ見れば、あなや。

わが意中の人は、まゝしき母に強ひられて、遁るゝ途なく、あだしむこがねを定められたり、嗚呼、わが戀人は、賀茂川の、流の水屑となりけるなり。

あはれ、戀人よ、わが妻よ、我は、おん身のあとを追はむとせり、よしや、百三十里を隔つといへども、われらが一念に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山もなく、河もなし、嗚呼、さりながら、戀人よ、わが身は死をねがへども、死することかなはず、老いたまひたる父上母上を、やしなひ奉るものは、我のみなれば、げにも、戀や、無常や、はかなのうき世や。

後談

ある日、母上、我に語られしは、そなたも、最早、二十五となりたれば、はやく、好き嫁を娶りて、孫の顔をも見せて、我等に安心させてよ、いつぞや、父上の語り給ひしは、ある人の世話にて、今年、二十一とやら、心といひ、わざといひ、姿までも美しく、吾家の嫁として、はづかしからぬものなり、年は、すこし、ふけたるやうなれど、家のためには、よかるべし、されど、そなたの所存を、きかではのことなれば、心おきなく、いへかしとのことなりき、嗚呼、わが妻は既にあり、しかしながら、今、その人は、この世の外なり、我は、たゞ、母上に、未だ早ければとのみいひてすごせり、されど、父上、母上は聽きたまはず、事に觸れ、折につけては、しば〳〵、すゝめたまひて、果は、さまでにいなむは、これをとおもふ女やある、または、約束せしものやあるなど、いひ給ふ、わが、この頃の胸の辛苦に、顏の色、身の振舞さへ、あらはなるまでに、沈みやしけむ、さらばこそ、父上、母上は、心おきなく語らふべきものありたらましかばなど、おぼされけめ、かく、おん心を推しまゐらすれば、いとゞ、不孝の罪の深きをおぼゆ、されど、わがおもふ人、約束せし人は、今は在らず、孝ならむか、吾心をいかにせむ、わがおもふ如く、あだし人を娶らざらむか、不孝となるべきをいかにせむ、不孝ならざらむがために、ながらへし命ながら、あだし妻を娶るがための命にあらず、さればとて、娶らざれば、父上、母上を養ひ奉る旨にもかなはず、さらば、娶るべきか、かの戀人のほかに、一人の妻あるなし、嗚呼我まどへり。

ある日、また、母上のいはるゝには、今、娶るは、ともかく、見合ばかりにてもせよ、其時、もし、心にかなはざれば、それまで、斷りいふに仔細はなし、また、よき時は、それときめて、なほ、娶るは早しとなれば、約束ばかり、なしおくもよからむ、さらば、我等の心も安るべしと、此時、我、おもふやう、かくまでに、いひたまふものを、いつも〳〵、おなじ言葉に遁るゝも苦しく、さらば、見合ばかりもなして、あ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れは心にかなひまをさずと、遁るゝこそよけれ、かく、おもひきはめて、母上に、見合すべきよしをまをせば、いたく、喜びたまひて、父上には、急に、世話する人の許へ行き給ひやがて、その日も定まりぬ、なほ、また、聞けば、見合すべき人の身の上は、名をば、千代と呼ばれて、父と、母と、兄と、嫂とのみにして、よろづ、不足なき家なりといへり。

見合すべき日は來れり、我は、父母と、倶に、その場所へ行けり、やがて、さきの人々も來れり、さてしも、心はあらねど、はしなくも、その人を見れば、初見の人にはぢらひてかうつむきし顔のよくは見えねど、いとはしき姿にはあらず、されど、我はいやなり、わが妻は唯一人なり、今、また娶ることとはせじ、見るもいやなり、とはおもひながら、嗚呼、わが戀人も、今なほ在らば、かやうならむかなど、そゞろにゆかしく、おぼえけるも、その人も、また、我を見られしこの一刹那、あはれ、うすくれなゐの、その顔の色、嗚呼、わが眼は迷へり、わが心も迷へり、似たとはおろか、その人そのまゝわがこひしとおもふ心のまよひに、かくは見ゆるにや、他人のそら似といへるものにや、まさしく、わが戀人は死したるなり、今、此所に現はれいづべきやうやある、嗚呼、あやまてり、わがいとしの妻は、今は、この世の外なり。

さても、我を、かくまでに苦しめたまふ天道怨めし、亡き戀人のおも影を、今、そのまゝに現はして、我をば何としたふものぞ。

妻を娶らねば、わが家の血統を絶つなり、祖先に對して不幸なりといはれし、父上のおん言葉、それも無理ならぬおん事なり、嫁も無く、孫をも見ざれば、老後のたのしみなしといはれし、母上のおん言葉、それも、また御無理ならず、かの戀人の、をはりのふみにも、この後、よき方を娶られて、末ながく、御孝養遊ばさるべくともありたり、さらば、彼を娶るべきか、吾心に忍びざるところあり、娶らざるべきか、また、堪へがたきところもあり。

竟に、この縁は結ばれたり、人々には、良縁なりとたゝへられつゝ、嗚呼、さても、わが心の中は。

やがて、その日となりぬ、日も、やゝ、西に傾けり、座敷々々に、燈火、また、光を放ちぬ、人々は來れり、儀式の宴は開かれたり、母上の手づから縫はれし、新しき衣に纒はれて、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其席につらなりし我は、そゞろに、おそろしき心地しつ、いとも、まばゆき燈火の影に、そと、かの方を見てければ、綿帽子深くはあれど、いよ〱、わが戀人の姿に似たり、されば、わが心、いとゞ、もだへて、いやなるが如く、好ましきが如く、ゆかしきがごとく、いとはしきが如く、うたゝ、心は空にして、口にも、筆にも、露はしえず。

いよ〱、綿帽子は抒かれたり、さても心のまよひか、いよ〱、その人なり、こは、死したる人の亡靈の、あはれ、今さらに、あくがれ來りしものにはあらずや。

鳴呼、天、我は、今、いふべき言葉を知らず、さきに怨みしは愚か、今よろこぶは痴か、似たりしとおもひしは、わがあやまりなりけり、この人は是かの人、いまの妻はむかしの妻、わが命なる戀人は、この世の外には逝ざりしなり。

夜深く、月うすく、うたゝ、もの凄き、賀茂川の岸、むかし戀しき柳の蔭に、浮世も、こゝも、波風の音のみと、あはれうたかた、消えなむ命、みさをのために沈づまれし、わが戀人のこゝろざし、今おもふだに、涙の種なり、さても、うれしきは、この流の水屑となりぬべかりしを、しがらみかけてとどめし人ぞ、その人は、今、わが妻の兄なり。

きのふ、けふ、夢や、現や、まぼろしや、我は何ともわかねども、机に近く座をしめつ、はしなくも、目につきしは手文庫なり、開けば、こゝに、かの文二通、また、その折のしのばれて、光次様まゐる、八重よりと、おもはずも、口より漏れし時、あなや、文がらは奪はれたり、母上の部屋に、語りてぞ居るとおもひし妻の、いつしか、うしろに立ちて、にらむ目もとも、ほゝゑむ口も。

時は今秋のをはり、日の光もやはらかく、籬のほとりに散り來る木の葉は、やゝ、しげゝれど、常磐木の下に、美しき秋海棠の花、あはれ、野邊の草花いかならむ、いざとて、二人手をたづさへて、根岸の里をたちいでつ、路に沿ふたる小川の流に、また、賀茂川のむかしをしのばれ、柳はなきやとおもふもをかし、あるは、尾花に蔦のからめるもおもしろく、または、水に近く野菊の咲けるもあはれふかし、さて、その一枝を手折らむとせし時、はからずもうつりし水鏡に、妹背かたみに、ほゝゑまれつ、また、歩み行く折から、いづこよりか木犀のにほひ、わたり鳥の囀づるも、にくからず、さて

は、すがれたる萩の花より、力なげに舞ひいでたる蝶も、なほ、ひとつにはあらず、とみれば、妻の髻のほとりに、白きものあり、それ、そなたの髪に蝶がといへど、おどろく色なく、あなたのお目のわるさ、これは、あはれの花なり、よく見たまへといふ、げに、これは、にほひもよし、誰やらが、葉ほど世間を知らぬといひし茶の花、その花も、そなたに愛られて、さこそ、嬉しくおぼゆらめといへば、また、そのやうなことを、いかにともいひたまへ、とても、あなたのお口にはかなはずなど、かたらひ行く、空も、心も、春めきて、蝶に遅れつ、さきだちつ、うつるふたつの影法師、あはれ、うれしき逍遥なるかも。

《そはり》

文しらべ

家康老後の敎（下の一）

一、堪忍の事身を守るの第一に候何事の藝術學に候ても堪忍身をこらし候堪忍なくては致し覺ゆる事もならぬ物にて候誠に一國を治めんと存ずるには一しほ專らに心掛可申事に候天道に叶ふも身の我儘をいたさぬかんにん地の理に叶ふも先祖ゟの一郡一城を失はぬやうの堪忍人和を得るも我氣隨を出さぬ堪忍其外身躰こと／＼くかんにんを用る事に候信は我儘に召仕者並民百姓の賞罰をおこなはず深をめぐみ近きも罰す是信の堪忍なり君に仕て身命を惜まず一度の約束をたがへず是義の堪忍之人の事を先にして身の事を後にし起るより寐るまで行儀正しくする是禮の堪忍なり我にまんじて人をないがしろにする事をせず是智の堪忍之君父に仕ふるに假初にも表裏けいはくをなさす古法古規を以我智の儘に行はず是信之堪忍之五躰の堪忍は美景美器美服美食に心を動かさず是目の堪忍之美香を好ます穢らわしきにほいにもおかされず是鼻の堪忍之雷また戰場にて弓鐵炮の音にも恐れす先陣に進み高名をする是耳の堪忍之酒を過さず美味を好ます是口の堪忍之其外手足にも堪忍有之古しへより堪忍を一生の間全く守る人は大身は家を起し國を治る小身は身上を起し家を治る堪忍のなす事十全に至らねば家をも國をも起す事はならぬものなりたとへば十の内八ッ九ッ守り一ッ二ッ破り候へは其破れし所にて夫迄の堪忍は徒らに成行ものにて候大方は堪忍つよき者の是迄こらへしがもはや堪忍ならぬと申事儘申事に候得共夫も義に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よつて破るはやぶるといふとも行はるゝものにて候へは多くは我智恵短きより我儘に落入て破るゝとに候身をはたし家を破り國郡を失ふ事たとへは弓をいる者の手前もよく引渡はなれにてゆるみ又は持出しなどして初の能は前も徒に成やう成ものにて候兎角堪忍は十全のものにて候日本國にて堪忍十全の者は楠正成壹人にて候初より一向堪忍氣なしといゝしは武田勝頼にて候夫故一生行ひの道に叶はず祖ゟ數代の家を失ひ身をはたし候織田殿は近世の大將にて人をも能遣ひ大氣にて智勇もすぐれし人にて候得共堪忍七ッ八ッにて破れ候故光秀かことも起り候大閤殿は古今大氣にて智勇いたつて堪忍つよかりける故卑賤ゟ廿年の中に天下の主にもなられ候程の事に候得共餘り大氣故分限の堪忍破れ候大氣程よき事はなく候へども夫も身の程を知らす万事に花れいに過分すぎ其外人に於ては大方にてはなくおごりと申ものにて候知行其外施す品も分に應じてこそよく候奢心なく物事儉約を用ひ常々其程を知るを以て政道正しくといふなれば下には過分に知行其外遣し物其能程に於し可申事古しへの賢君賢臣の過分に遣しもの万事花麗の行ひなく身をつゝしみけんやくを用ひし事に候

時報

○皇太后の仁慈　我が皇太后宮陛下には頃日來毛利公爵夫人其他の貴夫人が各宮妃殿下方の御趣旨を體し主唱者となり在外我陸海軍隊を慰勞せんが爲め寄贈品の購入費醵集の擧ある旨聞召し玉ひて深く御嘉賞あらせられ去十一日該費途の中へ金一千五百圓御下賜ありしを以て一同深く懿旨の優渥なるに感激せりと承はる

○共立女子職業學校の卒業式　神田一ッ橋なる共立女子職業學校にては去十一日午前八時より卒業證書授與式を同校講堂に於て擧行し校長水島精一氏は裁縫編物、圖畫、刺繡、造花各科の卒業生九十三名に證書を授與し且つ裁縫、編物兩科優等卒業生石川マサに皇后宮陛下恩賜の賞品火熨、編物手本（三枚）を與へたりと

○支那服裝の日本婦人　日清事件起りてより橫濱在留支那人は皆夫々に歸國する中多年夫婦同樣に暮し居たる履妾の日本婦人は十中の三四可愛の小兒を抱へ居りて支那人は今更らに袖を分つを惜めども餘儀なく子をば其母に托するあり又は自から携へて歸るもありそが中に事情離れ難き日本婦人は其雇主と共に淸國に渡行せんとて旅劵の下附を神奈川縣廳に願ひ出でたれど此際容易に許容せられざるにぞ終に種々の奸策を廻らし頭を圓めて支那婦人の法被を着け耳には金環を下げて其等の目關を潜り忍びて渡行せんとするもの者あるより其筋にては特に掛員を設けて嚴密の注意を加へたれば事の發覺を恐れて思ひ止りし者も多しと云ふ

○郵便及鐵道事業に女子を採用す　郵便事業に女子を使用するとは最初佛國に行はれしが頁成蹟を呈せしを以て更に其範圍を伸張して役員の執るべき業務にも往々女子を使用するに至れり英國も亦佛國に倣ひ女子を郵便事業に使用せるが現に英國の郵便業に從事する女子の數は郵便業に屬する總人員（配達夫を除く）の二割五分を占む和蘭に於ては郵便及鐵道事業に女子を使用するには其事業中の或る部分のみに制限せるを以て鐵道業に從事する女子の數は七百二十人に過ぎず之に反し瑞西に於ては此の如き制限を設けざるも女子にして鐵道業に從事する者なく唯電信及電話業を執る者あるのみスカンヂナヴヰア半島に於ては女子を此等の事

業に使用すること大に行れ瑞典及諾威並に丁抹に於ては郵便配達夫の職業を除くの外女子は總ての郵便事業に從ふを得而して其給料の如きも男子の給料と異なることなし且つ丁抹に於ては女子にして郵便局長及國會議事速記者と爲る者あり智利に於ては鐵道馬車馭者の職業は專ら女子の掌握する所と爲れりと云ふ

○一女子の獻納二千金　今や日清事件起りて臣民たるもの宜しく國家の爲めに盡すべき時なりとて福岡縣下門肉豊後町の日野しづ子は二千金を獻納せりと云ふ

○朝鮮に於ける民事上の改革　朝鮮に於ては軍國機務會議に於て議決し已に裁可濟となりし改革案種々あるうち家庭、婦人に關するもの左の如し

一、男女の早婚を嚴禁し男子二十歲、女子十六歲以後にして始めて嫁娶を許す事
一、嫡、妾俱子なき時始めて率養を許し舊典を申明する事
一、婦女の再嫁は貴賤に論なく其自由に任ずる事
一、公私奴婢の典を一切革罷し人口を販賣するを禁ずる事

○篤志看護婦人臨時相談會　去る八日日本赤十字社內議事室に於て開かれたり來會者は左の貴夫人にして

幹事長小松宮頼子殿下、幹事副長小松宮八重子殿下、幹事伯爵夫人伊藤梅子、花房千鶴子、子爵夫人仁禮壽賀子、上野幾子、末松生子、足立小藤子、新山雅樂子

會　員

伯爵夫人西鄉淸子、仝松方滿左子、同大山捨松、同戶田極子、子爵夫人松平昭子、侯爵夫人前田朗子、子爵夫人田中伊與子、大澤作子、加藤秋信、伊知地雪子、小山內鐸子、松平季子、北尾すげ子、小野崎たつ子、佐土原繁子、柴田千田子、長瀧鏡子、兒玉久和子、加嶋福子、中牟田常子、柳勝子、勝田榮子、

席定るや幹事長小松宮御息所殿下より今回我が帝國と支那と戰端を開きたるに付ては我が篤志婦人看護會は此際をもつて年來の素志を遂せざるべからずとて高崎別當をして御辭を朗讀せしめたり、朗讀終りて後幹事及び會員は相談會に取懸り各自親ら繃帶を調製して傷病兵に送るに付いては欠點なき樣赤十字社病院にて製法を傳習して調製すると戰爭の模樣によりては各自も出張して看護婦を督助し自ら其勞苦を頒つこと等を決議して散會したり

◎津田ふき子之略歷

ふき子は津田仙氏の第三女にして明治六年八月十九日を以て東京麻布新堀町貳番地に生る時恰も墺國世界大博覧會開設に際し嚴君仙氏は其審査員として該地に出張し不在中なりし二歲の時東京築地十一番美以教會堂に於て宣教師ジュリアス、ソーパル氏より領洗し雙親鞠育の下に基督の眞理を教へられ歲を加ふると共に神に於ける信仰益深く常に至愛なる天父の恩惠を感謝し之に倚賴して毫も疑ふ所あらざりき八歲にして麻布南山小學校に入り明治十六年に至るまで小學の科程を修むること三年其間頗る勤勉にして某年冬の如き寒威凜冽降雪甚だしく出席する生徒一人もなかりしにふき子毫も之を意とせず獨り登校して大に教師を驚かしたることありと云ふ十一歲にして下田歌子氏の設立せる桃夭學校に入り和漢學及び和歌を學ぶこと二年偶華族女學校の創立せらるゝに會す乃ち同校に轉し高等小學第一級に編入せられ翌十九年七月三十一日を以て華族女學校小學全科を卒業す時に歲十三明治廿二年紀元節の日明宮殿下皇太子冊立の大典に際し華族女學校生徒として祝祠を奉呈す蓋しふき子和文に長ずるを以て其撰に當りしものなり同廿五年七月十八日華族女學校中學全科を卒業すふき子平素勤勉の効空しからず此際特に同校より學業優等にして平素の行狀宜しきを以て言海及び數の園各壹部宛賞與せらる卒業の後は家に歸り專ら母を扶けて家政を料理せり

是より先きふき子拾壹歲の時腸窒扶斯の大患に罹りたることあるも幸に平癒することを得爾來身躰頗る健康なりしが本年一月頃より心臟病を患ふ今回は自ら尋常の病にあらざるを知り豫て覺悟する所ありたるが如し然れども永眠に先つ一週間前迄は每朝家內の集りに會して與に聖書之友日課を讀むを怠らざりし本月三日病遽に革り遂に同日午後五時を以て安然永逝の眠に就けり享年二十

ふき子病中嘗て語りて曰へらく「余は本年の誕生日を以て正に成年に達す是父母の手を離れ社會に獨立すべき齡なり從來養ひ來れる力を試むべきの秋なり然るに不幸にして此不起の病を得たり遂に之を如何ともするなし顧ふに余が今日社會に立ちて何事をか爲し得べき力を準備し得たるは是れ偏に慈親の愛護と教師の懇切なる訓誨と朋友の誘掖とに由るものなり而して余は空しく志を懷ひて一事の爲す無きを思へば此等の方々に負くこと多し余が最も遺憾に堪へざるは此一事なり」と聞く者皆暗然たりき生ある者必ず死あるは人生の常なりと雖も壯年空しく大志を懷ひて地下に就くは最も哀む可きの事なり噫

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人述
百人一首講義 全 正價 金二拾八錢 郵稅 金四錢

同
文法口授 全 正價 金拾二錢 郵稅 金二錢

若松賤子譯
小公子 上 正價 金二拾八錢 郵稅 金八錢

櫻井明石君重譯
希臘孝子 **腓立比物語** 全 正價 金三拾五錢 郵稅 金四錢

小此木、布川両著
俳諧史傳 全 正價 金三拾錢 郵稅 金四錢

池袋清風大人著
淺瀨の波 第一編 正價 金二拾八錢 第二編 正價 金三拾二錢 郵稅 金四錢宛

星野愼之輔君編
應用植物編 全 正價 金四拾錢 郵稅 金六錢

同
昆虫植物金石 **採集法** 全 正價 金八錢 郵稅 金二錢

發賣所 女學雜誌社書店

評論

第二十七號 八月十五日發兌

臨機高嘯
一大時機を觀る
眼前の熱動
大才出づるの機會
達人は至寶なり
大才須らく山を出づべし
英語及び日本語
維新の大事業

日本人外國傳道の聲
日本は大國なり
南洲先生を景慕す
深谷大澤原地を遺せ
英魯何れか心友
來るべき機會

偉人物
十四頁の一大長論文

岐阜縣治水大策
精緻の表一葉あり

發賣所 女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第二回女子夏季學校廣告

來三十日午后四時より横濱山手百七十八番館フェリス女學校に於て開校す◎聽講料一人二十錢、寄宿料一日十錢、夜具は別に賃借を要す◎聽講は女子のみとすれども附添の父兄及女子教育に從事する又は從事せる男子の來會は差支なし◎九月七日午后七時閉校◎右廣告す

第二回女子夏季學校　書記

明治女學校生徒募集

普通二年級へ（小學高等科卒業相當の者）廿名、同三年級へ十名、高等文科一年級へ五名入學を許す志願の者は九月十日迄に申出べし●小學全科卒業の者は入校后三年にして普通科を全了するを得●學資は授業料毎月一圓二十錢寄宿料一切三圓八十錢圖書費凡そ一圓乃至二圓程とす

東京麴町區下六番町六番地

明治女學校

女生徒募集

一本校の普通學部は高等科普通及ひ豫備科より成る又別に職業部を置く但し來學期には築地海岸學校は本校に合併すへし

一寄宿舍は百事完備す

一入學試驗は九月十一日午前九時

一規則の入用あらば御報知次第送呈すへし

明治廿七年八月

東京市赤阪區青山南町七丁目

東京英和女學校

女生徒募集

來ル九月十一日始業。各級入學ヲ得。規則書望ミノ方ハ郵劵二錢ヲ送ラレヨ。

東京京橋區新榮町

私立　立教女學校

女學雜誌前號要目

遠征の軍士を憶ふ　遥かに同胞将士が苦戰を憶ふ、吾輩留まつて内にあり、公務豈に彼等に劣るべけんや、決死豈に彼れ等に恥づべけんや。

基督教徒看護婦團　漫にナイテンゲールを慕ひ徒らにアックス女史を贊するをなかれ。聖機眼頭にあり、古人今事を指ざす。如今盡すべき所なからずや。

味噌汁は農家の牛乳　農學士齋藤音作君此の警語あり、歸省の女生に公案を與へて、故郷に探撿すべき問題を寄す。有益にして斬新の文。

ヘルバルトの母　今の教育界は、ヘルバルトの反響なり、此の人何如にして世に成りしか、須からく先づ其母を知るべし。

花園女史の小說　橋松佳話中の一偉女夫、經綸遠大、茲に幾多の大事業を結構し了んぬ。其の終末を看よ。

神戸女學院生徒募集

本院九月十二日始業豫備普通高等の三科共其學力に應し入學を許す有志者は九月上旬迄に御申込あるべし

神戸市山本通四丁目○舊英和女學校○神戸女學院

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金十錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半部増と定む。

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY